

Y a g o r o u

弥五郎遺跡

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第115集

2016

八女市教育委員会

Y a g o r o u

弥五郎遺跡

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第115集

2016

八女市教育委員会

序

本報告書は、八女市室岡に所在する弥五郎遺跡の中で、共同住宅建設のため現地保存が困難となった部分について記録保存発掘調査を行ったものです。調査面積は 150 m²と小さいですが、弥五郎遺跡で実施された初の本格的発掘調査です。調査では平安時代の建物跡や貴重な土器などが発見され、室岡地区の平安時代の様子が、わずかですが明らかとなりました。

八女市の歴史を知る資料として、活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、文化財保護にご協力いただきました開発事業者の皆様、発掘作業員・整理作業員の皆様、および関係各位に改めて感謝申し上げます。

今後も、八女市の文化財保護行政にご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成28年12月28日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例言

- ・ 本書は、共同住宅建設に先立ち井手保臣氏（仲介：ダイワハウス株式会社）の委託を受けて実施した、八女市室岡字志計775番地1所在の弥五郎遺跡発掘調査報告書である。
- ・ 本報告の発掘調査は平成27年度に八女市教育委員会が実施し、平成28年度は八女市教育委員会が調査主体となり、八女市役所新社会推進部文化振興課の檀佳克が担当した。
- ・ 本書の遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）をもとに作成し、図面で示す方位は、全て座標北である。
- ・ 本書で使用した遺構実測図は、橋村照子・月足まつみ・檀佳克で作成した。
- ・ 本書掲載の遺物実測図は、檀および整理作業員で作成した。
- ・ 本書作成にあたり、出土品等について下記の方々からご教示を得た。記して感謝申し上げます。上村英士、小林勇作、永見秀徳（以上、筑後市教育委員会）、白木守、神保公久（以上、久留米市文化財課）（敬称略）
- ・ 調査図面・写真および出土遺物は八女市教育委員会（八女市役所新社会推進部文化振興課文化財保護係）で保管している。有効な活用を望む。

目 次

本文目次

1 調査の経緯と経過	1
2 遺跡の位置と環境（地理的環境・歴史的環境）	4
3 調査の方法と基本層序	4
4 出土遺構・出土遺物	6
5 総括	12

挿図目次

第 1 図 弥五郎遺跡の位置	
第 2 図 弥五郎遺跡の位置および周辺の遺跡（S = 1 / 2,500）	
第 3 図 弥五郎遺跡調査区全体図（S = 1 / 250）	
第 4 図 弥五郎遺跡 SB01 実測図（S = 1 / 40）	
第 5 図 弥五郎遺跡 SB02 実測図（S = 1 / 40）	
第 6 図 弥五郎遺跡 SB03 実測図（S = 1 / 40）	
第 7 図 弥五郎遺跡 SB 出土遺物（S = 1 / 2）	
第 8 図 弥五郎遺跡 SK02 実測図（S = 1 / 40）	
第 9 図 弥五郎遺跡 SK04 実測図（S = 1 / 40）	
第 10 図 弥五郎遺跡 SK02 出土遺物 1（S = 1 / 2）	
第 11 図 弥五郎遺跡 SK02 出土遺物 2（S = 1 / 2）	
第 12 図 弥五郎遺跡 SK02 出土遺物 3（S = 1 / 2）	
第 13 図 弥五郎遺跡 SK03 出土遺物（S = 1 / 2）	
第 14 図 弥五郎遺跡 SK04 出土遺物（S = 1 / 2）	
第 15 図 弥五郎遺跡表土層出土遺物（S = 1 / 2）	

表目次

第 1 図 弥五郎遺跡出土遺物観察表	
--------------------	--

1 調査の経過

今回発掘調査を実施した弥五郎遺跡は、福岡県八女市室岡字志計 775 番地 1 に所在する。

本調査に至る発端は、当該地に共同住宅建設が計画されたことである。平成 27 年 3 月 10 日に売買に先立つ埋蔵文化財有無の確認の依頼があり、そこで、埋蔵文化財有無確認のための確認調査を平成 27 年 3 月 16 日に実施した（担当：八女市教育委員会文化課 永田寧）。その結果、地表下約 80 ～ 95cm で柱穴や弥生土器等の出土が確認された。このことから、当該地における工事の掘削深度によっては発掘調査が必要となる可能性がある旨、事業者に回答した（平成 27 年 4 月 10 日付け 27 八文文第 29 号）。



第 1 図 弥五郎遺跡の位置

その後、土地の売買がなされた後に共同住宅建設の計画が固まり、平成 27 年 7 月 2 日に文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出があり、工事による掘削深度が深いことから、埋蔵文化財への影響があることは疑いなかった。

27 八文文第 265-1 号で県教育委員会に試掘の結果発掘調査が必要と思われる旨副申し、福岡県教育委員会より平成 27 年 8 月 3 日付け 27 教文第 2 号-500 で発掘調査の指示があり、その旨文書で事業者へ通知した（平成 27 年 8 月 11 日付け 27 八文文第 265-3 号）。

その後、事業者と協議のうえ、工事掘削深度が必要な為遺跡の一部を現状保存することが困難である状況が明らかとなった。よって、平成 27 年 10 月以降に発掘調査を実施する方針で事業者と協議を重ねた。

平成 27 年 10 月 15 日に発掘調査の覚書・協定書を締結し、住宅建設予定地の約 155 m²の現地発掘作業を平成 27 年度に、整理作業および報告書作成作業を平成 28 年度に実施することとなった。

八女市教育委員会では、平成 27 年 10 月 26 日付け 27 八文文第 532 号で文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく発掘調査の報告をし、現地作業を平成 27 年 11 月 4 日から着手し、平成 27 年 11 月 17 日に完了した。なお、発掘調査日誌から経過を抜粋すると、11 月 4・7 日に表土除去作業、8・9 日に遺構検出、9 日～11 日に遺構掘削、11 日に完掘、図面記録作成を 14～16 日に行っている。

出土遺物は整理箱 1 箱分で、平成 27 年 11 月 17 日に八女警察署に発見届（27 八文文第 589 号）および福岡県教育委員会に保管証（27 八文文第 590 号）を提出した。平成 27 年度は整理作業（遺物の洗浄・注記・復元及び現場図面整理）を実施し、発掘作業の終了報告を平成 28 年 2 月 25 日に県教育委員会に提出した。

その後、整理作業は平成 28 年度も継続して実施し、平成 28 年 12 月に報告書作成作業を完了した。発掘調査後、当該地は 3 階建ての集合住宅建設工事がなされ、平成 28 年現在は共同住宅として利用されている。

なお、調査当時の体制は、以下のとおりである。

【平成 27 年度】（現地作業および整理作業）

（調査委託）井手 保臣（仲介：大和ハウス株式会社）

（調査主体・調査統括）

八女市教育委員会

教 育 長	西島 民生
文 化 課	課 長 井上 秀樹
	課長補佐 月足 稔
文化課文化財保護係	係 長 中川 寿賀子
同	係 員 永田 寧
	檀 佳克（調査担当）
	渡部 真弓

【平成 28 年度】（整理作業・報告書作成・刊行）

（調査委託）井手 保臣（仲介：大和ハウス株式会社）

（調査主体）

八女市教育委員会 教育長 西島 民生

（調査統括）

八女市役所（新社会推進部文化振興課 文化財保護係）

新社会推進部	部 長 室園 哲也
文化振興課	課 長 栗秋 克彦
文化振興課	
文化財保護係	係 長 中川 寿賀子
同	係 員 永田 寧
	檀 佳克（整理・報告書担当）
	渡部 真弓
嘱 託	多賀 晴司



第2図 弥五郎遺跡の位置および周辺の遺跡 (S=1/2,500)

2 遺跡の位置と環境（地理的環境・歴史的環境）

弥五郎遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地「弥五郎遺跡」の中に所在し、室岡遺跡群の西端部分に位置する。旧八女市域に広がる平野部の北東端に位置し、すぐ北側には八女丘陵が東西に延びている。八女市西端に位置し、すぐ西側は筑後市となるが、西側には平野部が広がり、現地では佐賀市付近まで遮るものはなく見通しが利く。また、すぐ南側には一級河川である山ノ井川が東西に流れており、弥五郎遺跡は八女丘陵と山ノ井川にはさまれた段丘上に位置している。

弥五郎遺跡では、過去に大量の弥生土器が出土したことが知られており、平成 21 年度に今回調査地の南側で共同住宅建設に伴い実施した確認調査でも、地表下約 50 ～ 60cm に弥生時代後期の遺構・遺物が濃密に存在することが知られていた。また、調査地北側に東西に延びる国道 442 号線バイパスでは、調査地北側付近でも多くの発掘調査が実施されており、志計遺跡や織部屋敷遺跡・田代遺跡などで近世・近代を中心とした遺構・遺物が発見されている。

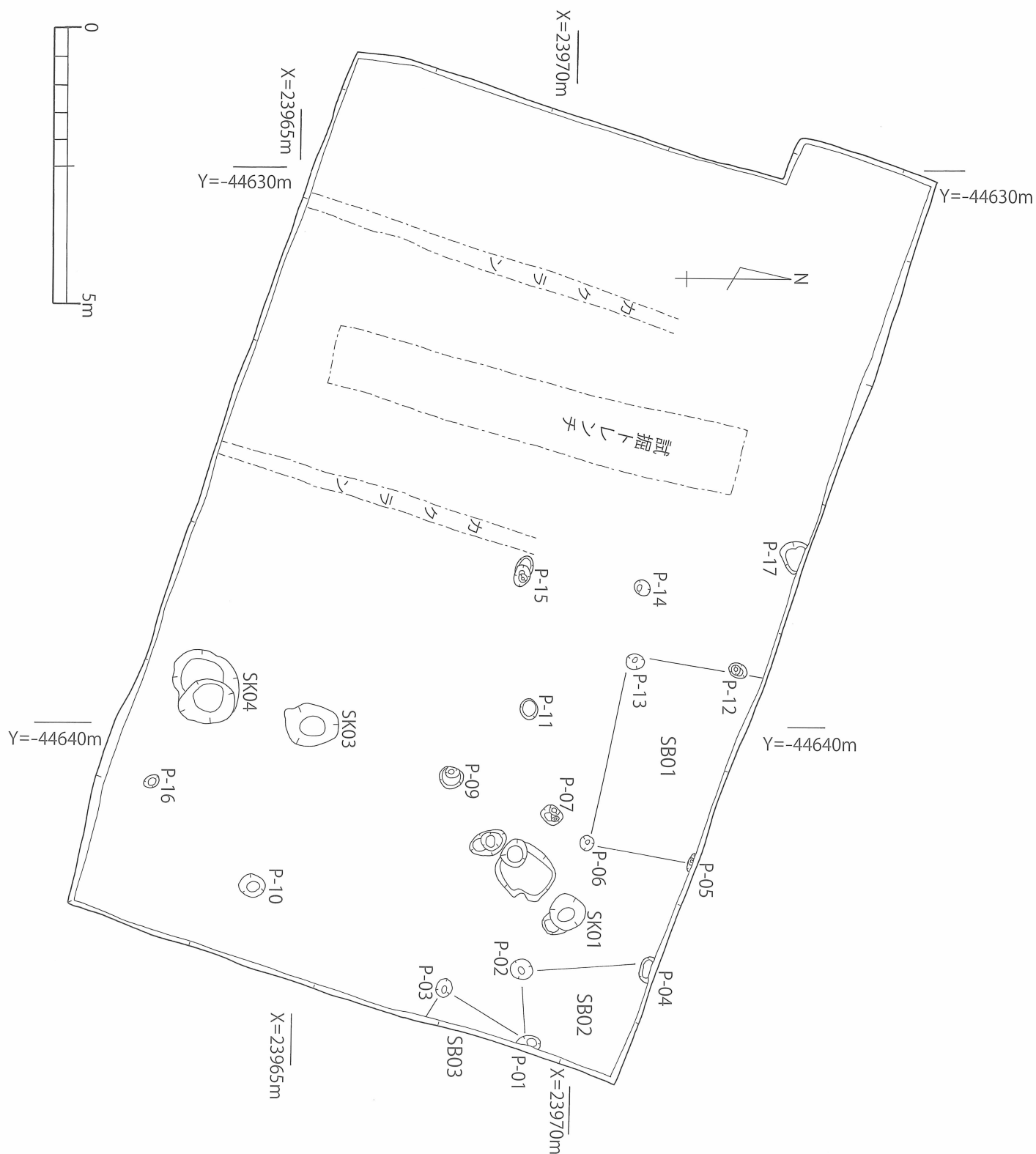
なお、調査を実施した平成 27 年度から報告書作成中の平成 28 年度にかけて、弥五郎遺跡周辺では宅地造成・下水道敷設等に伴って試掘・確認調査や工事立会が相次いだ。その結果、現在の弥五郎遺跡の範囲よりもさらに東側に向かって弥生時代後期および古墳時代前期の集落跡が広がっている状況が確認され（室岡遺跡群の範囲内）、弥五郎遺跡から九州縦貫道に伴い発掘調査がなされた野口遺跡付近には集落跡が良好に残存している状況が確認された。加えて、今回の調査では、弥生時代の遺構・遺物が発見されるのではないかとという予想に反して、平安時代の遺構・遺物が発見されたことから、弥五郎遺跡付近がかなり長い時間幅で土地利用がされていた状況が明らかとなってきた。

以上のように、弥五郎遺跡周辺は旧八女市の中でも弥生時代をはじめとして各時代の遺構・遺物が濃密に存在する地域であるため、今後も周辺地域での開発には細心の注意を要する。

3 調査の方法と基本層序

調査では、表土除去後に人力で掘削をした。表土を除去した状態で、既に包含層は過去の削平により消失している状況であり、表土直下で遺構面が確認された。

基本土層は表土層（地表面～地表下約 20cm）の下に、表土に黒ボク土ブロック・黄色ローム土ブロックが混在する攪乱層があり（地表下約 20 ～ 80cm）、表土層には現代の遺物が含まれることから、近年に造成等の攪乱を受けたことは明らかであった。その下位の地表下約 80cm で、やや暗褐色の黄色ローム層が検出され、その面でピット・土坑が検出された。遺構検出面から約 10cm 下位まで掘り下げると黄色ローム層に変わる状況であり、包含層はおろか弥生時代～平安時代の旧地表面も残存していない状況であり、著しい削平を受けており遺跡の残存状況は決して良好とは言えなかった。



第3図 弥五郎遺跡調査区全体図 (S = 1 / 250)

調査では、検出されたピットに関しては掘削過程で斜めに入り込む等の断面形状により、明らかに動植物によるものと思われるものと、柱穴になりそうなものを区別し、原図に明記した。なお、本報告では柱穴の可能性のあるもののみに関して第4図に示した。

また、柱穴の平面配置や形状等を現地で検討し、可能性が考えられるものとして3棟の掘立柱建物跡を示した。ただし、全て発掘調査区外に広がる建物跡であることから、やや根拠不十分であり、本調査で確実に建物跡と証明されたものではなく、今後の隣接地調査の成果を待たなければならないことを付記する。

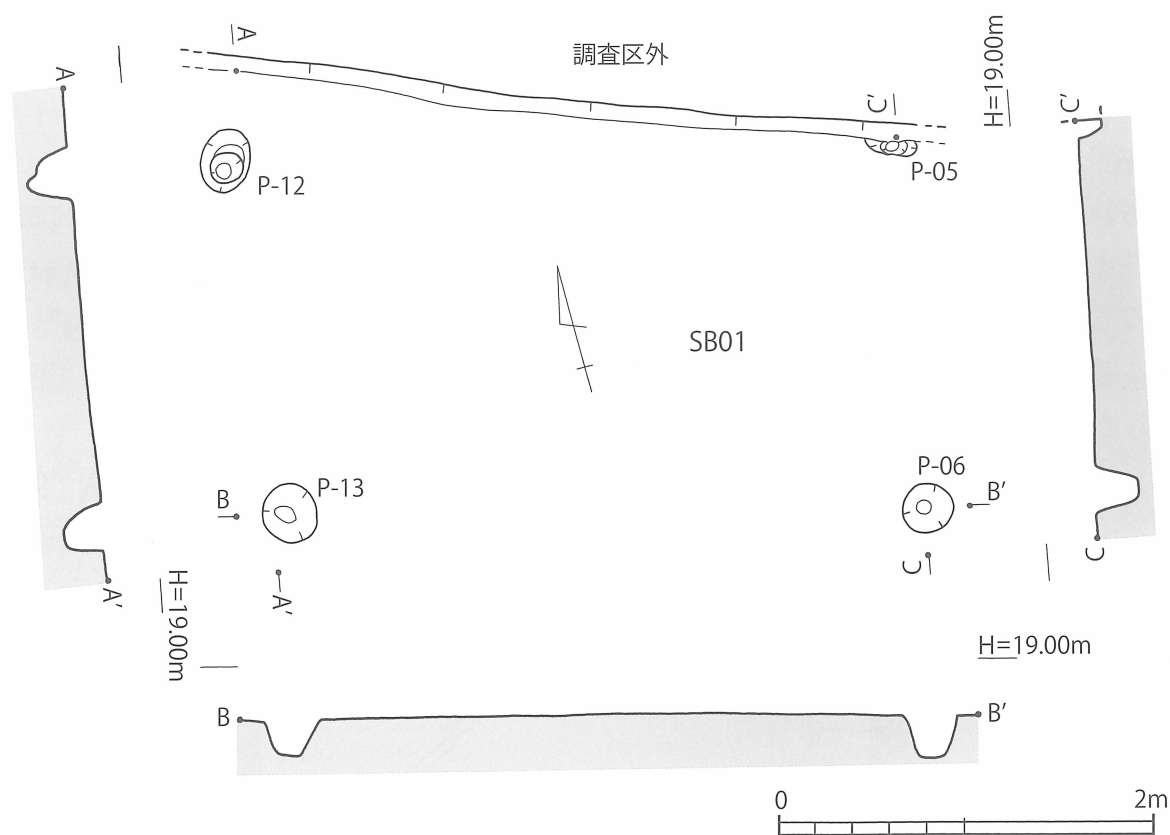
4 出土遺構・出土遺物

遺構は、調査区の東半部分を中心に発見された。なお、調査区西側は削平により遺構が残存していない状況であるものと思われ、今回の遺構検出面の下位の土層である黄色ローム層は東側に向かうほど下降していることから、調査区の旧地形は西側から東側へと下降する地形である。

検出された遺構は、柱穴となる可能性が高いピットが 17 基（P-01 ～ P-17）、土坑が 4 基（SK01 ～ SK04）であった。ピットの配置を現地で検討した結果、掘立柱建物の可能性があるピット列が 3 棟分考えられたが（SB01 ～ SB03）、いずれも建物は調査区外に延びていることから、平面形も明確ではなく、検証は本調査の結果のみでは不可能である。よって今回は、考え得る建物跡の可能性のみを示しておき、今後の調査による検証を期したい。

① 掘立柱建物跡（S B）

今回の調査で、柱穴配置から建物跡の可能性のあるものは 3 棟見いだされた。第 4 図に示したピットはいずれも柱穴の可能性が高く、遺構は削平されて残存状況はあまり良くなかったこともあり、建物跡は下記のもの以上に存在した可能性が高いことを付記しておく。以下に、3 棟の概要を示す。

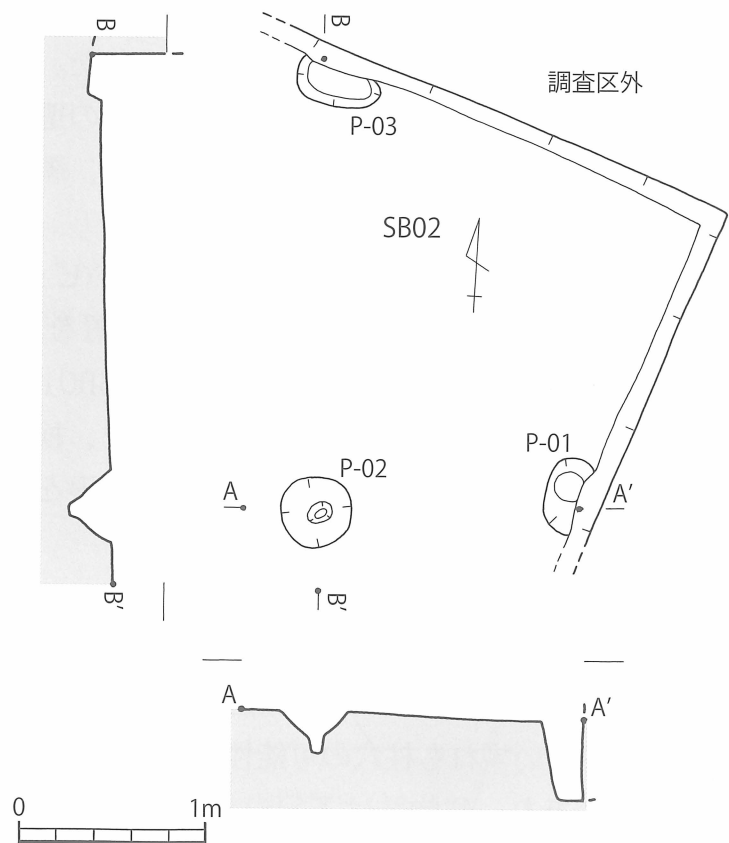


第 4 図 弥五郎遺跡 SB01 実測図（S = 1 / 40）

SB01・02 (第5・6図、
第7図)

調査区北東端で検出された建物跡であり、ともに調査区外に延び、SB01は2穴の列、SB02は南西部分のみ3穴のピット列のみである。覆土は黒ボク土層に黄色ロームブロックが混在する土層であった。配置やピットの形状等から建物跡の柱穴になる可能性は非常に高く、柱抜き痕等は精査したが、明確に把握することはできなかった。

覆土からは、平安時代に属すると思われる土師器が検出されている(第7図1)。

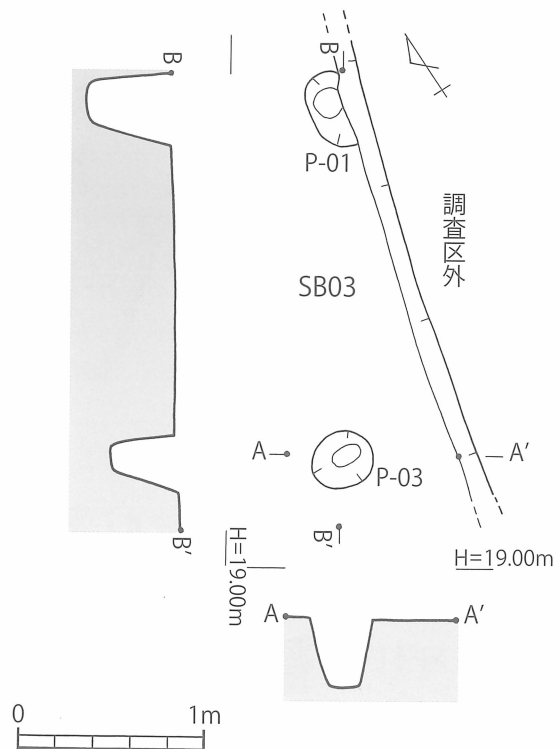


第5図 弥五郎遺跡 SB02 実測図 (S=1/40)

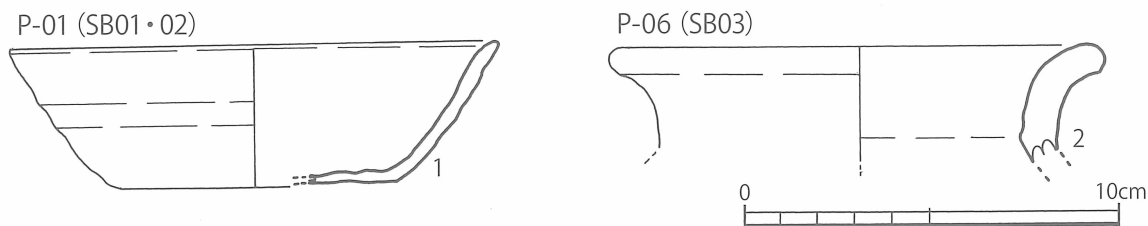
SB03 (第6図、第7図)

調査区北端で検出された建物跡であり、北半部分は調査区外に延びる。残存状況は良好ではないが、2間×3間の掘立柱建物となるものと思われる。ただし、南端部の2間に関しては中央の柱穴は精査したが確認することができなかった。

覆土からは、土師器が検出されている(第7図2)。



第6図 弥五郎遺跡 SB03 実測図
(S=1/40)



第7図 弥五郎遺跡 SB 出土遺物 (S = 1 / 2)

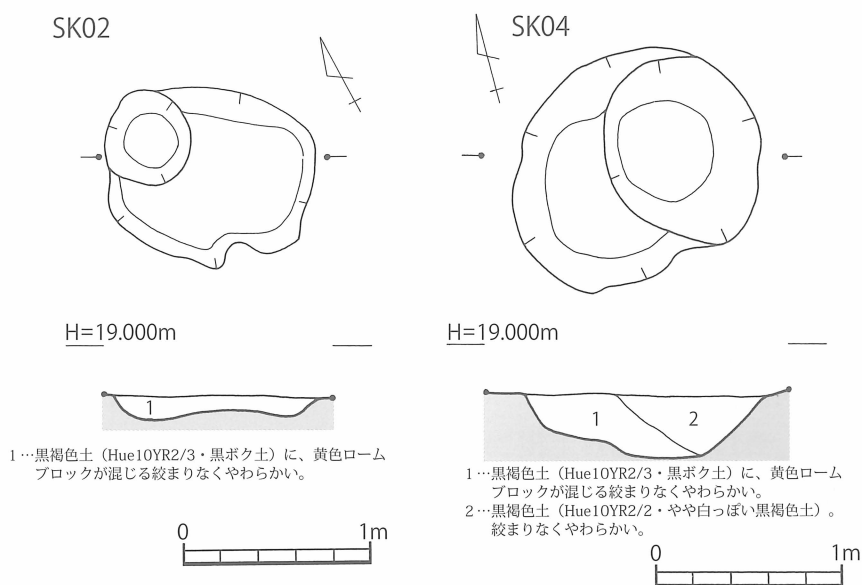
② 土坑 (SK)

土坑は調査区の東側に、南北に一行に並ぶような配置で4基発見された。遺構の残存状況も決して良い状況ではなく、調査範囲が狭いこともあり、前述の掘立柱建物との関連等は明確にすることは困難であった。また調査の結果、2つ以上のピットないし土坑が重なるものであることが判明したものもある (SK01・SK04) が、以下は調査時に付した名称で報告する。

以下に、調査で検出された土坑の概要を記す。

SK01 (第3図参照)

調査区北東部で検出された土坑であり、調査での掘削の結果、2つのピットないし土坑が重なっている状況であることが判明した。遺物は土師器の坏や甕、須恵器壺の破片が出土した (写真図版参照)。

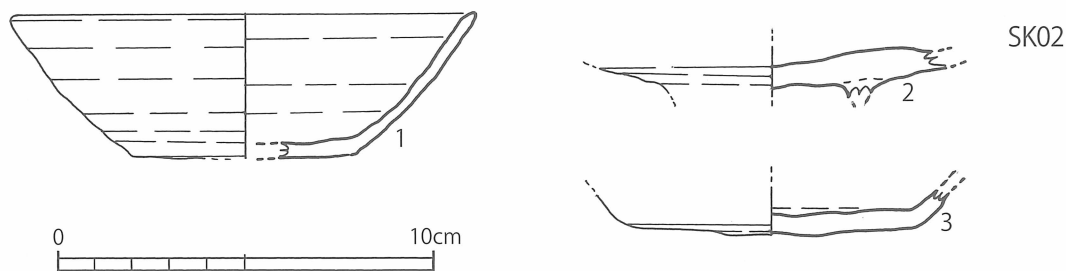


SK02 (第8図)

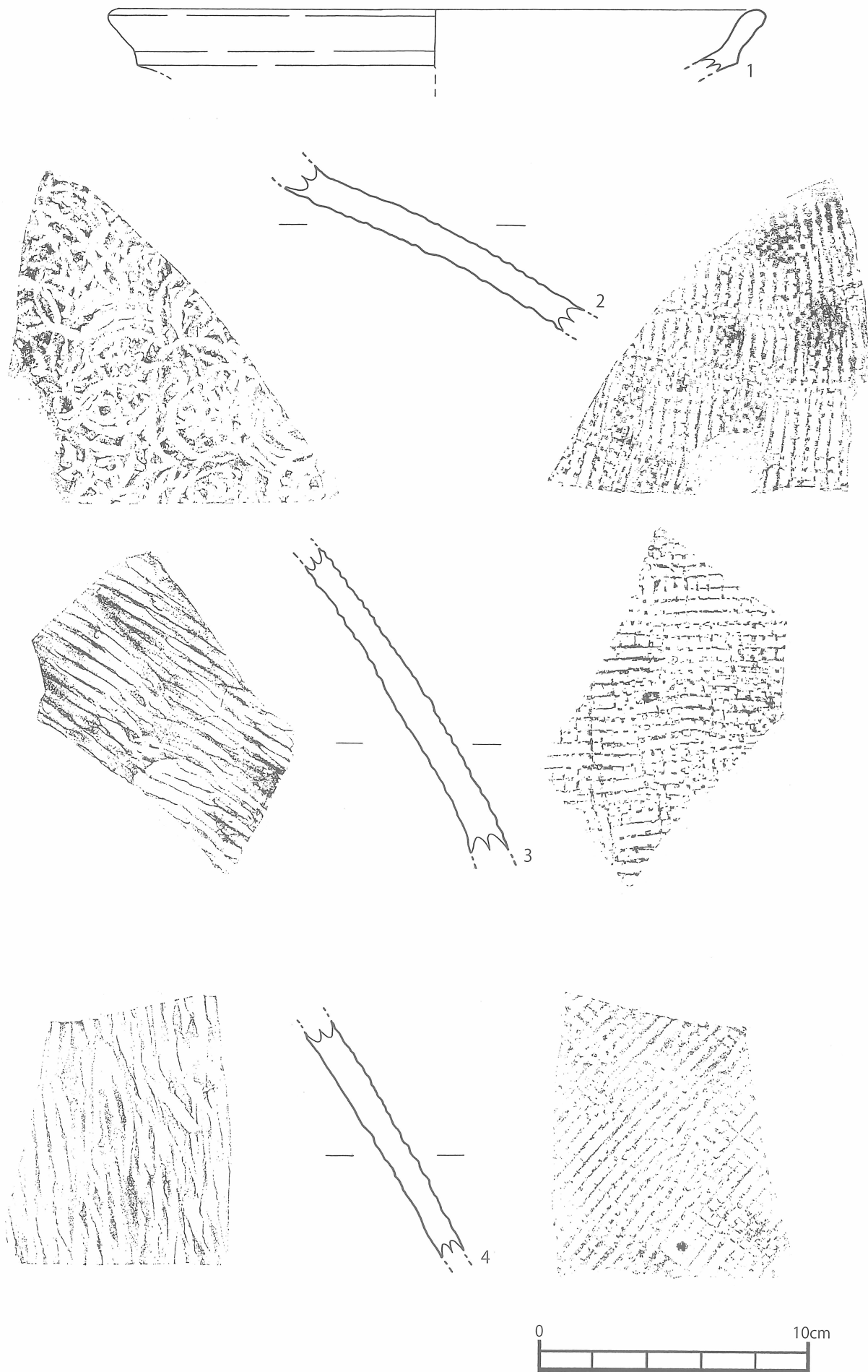
調査区北東部で

第8図 弥五郎遺跡 SK02
実測図 (S = 1 / 40)

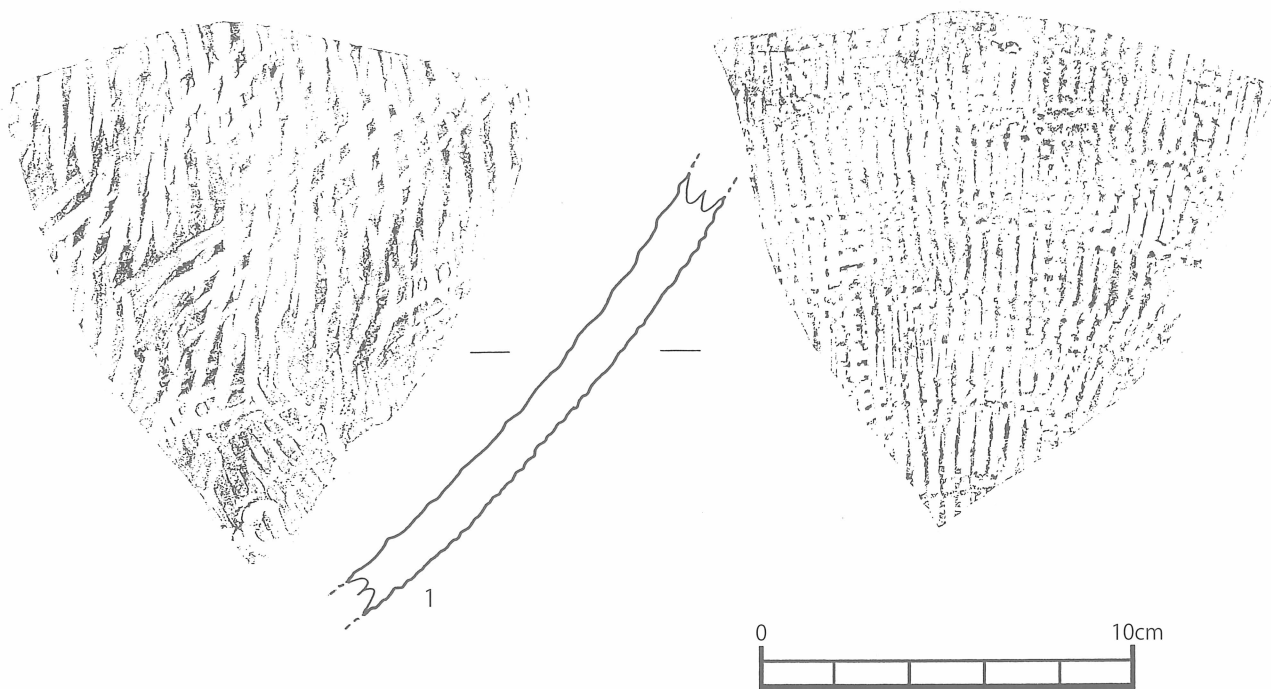
第9図 弥五郎遺跡 SK04
実測図 (S = 1 / 40)



第10図 弥五郎遺跡 SK02 出土遺物 1 (S = 1 / 2)



第 11 図 弥五郎遺跡 SK02 出土遺物 2 (S=1 / 2)



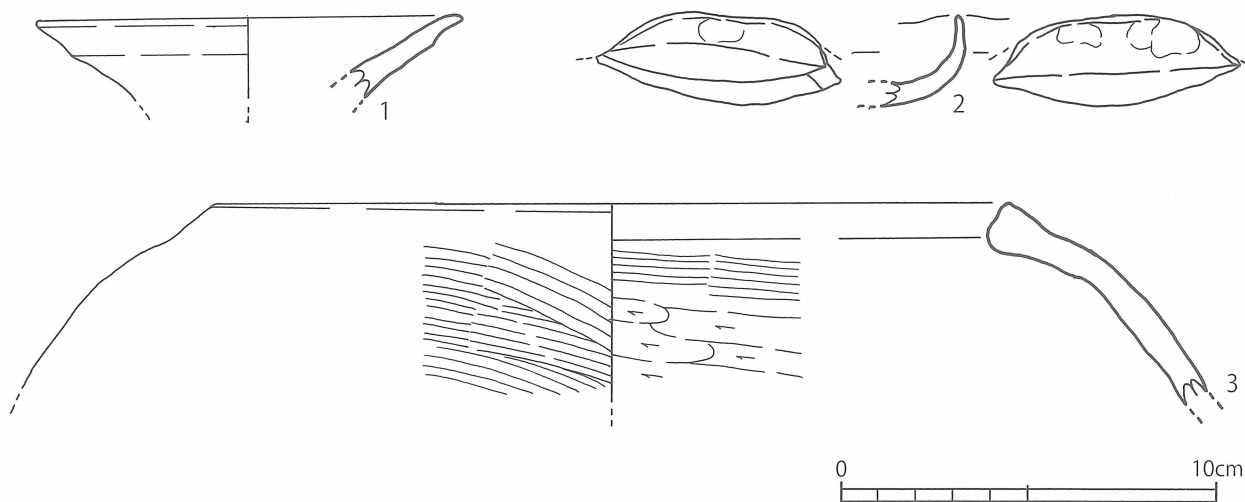
第 12 図 弥五郎遺跡 SK02 出土遺物 3 (S = 1 / 2)

検出された土坑である。深さは 10 cm も残存していなかったが、土坑内からは土師器・須恵器の破片が多く出土した（第 10 ～ 12 図および写真図版参照）。坏の底部は全てヘラ切りである。

SK03（第 3 図参照）

調査区南東部で検出された土坑である。やや深さのある土坑であり、遺物は覆土中上位で土師器・緑釉陶器が出土した（第 13 図）。

第 14 図 1・2 は緑釉陶器であるが、調査終了後整理作業中に出土が確認された。小片であり、覆土に混じる形で中位より土器が出土していた。調査時の記憶からも、埋没時に



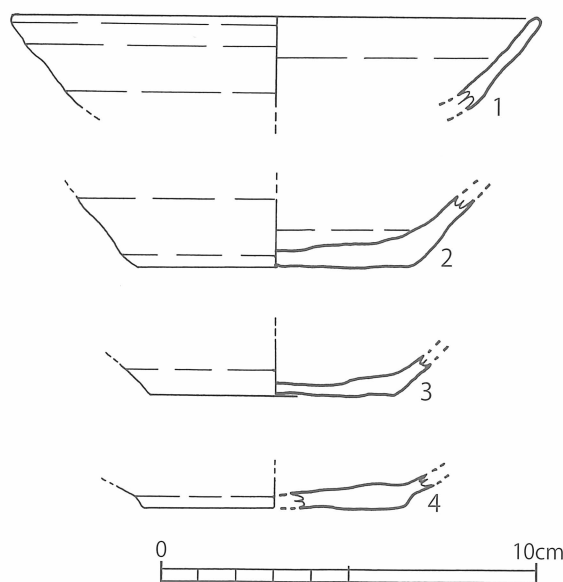
第 13 図 弥五郎遺跡 SK03 出土遺物 (S = 1 / 2)

伴うものか、周辺からの混入と考えられる。釉や胎土等の特徴から、防長系である可能性が高いと思われる。14 図 1 は皿、14 図 2 は耳皿の耳の部分と思われる。緑釉陶器の出土は、室岡遺跡群はじめ弥五郎遺跡周辺では初の出土である。

SK04 (第 14 図)

調査区南東部で検出された土坑である。調査の結果、2つの土坑が切り合って重なっている状況であることが判明したが、ここでは調査時のとおり、2つを合わせて SK04 として報告する。

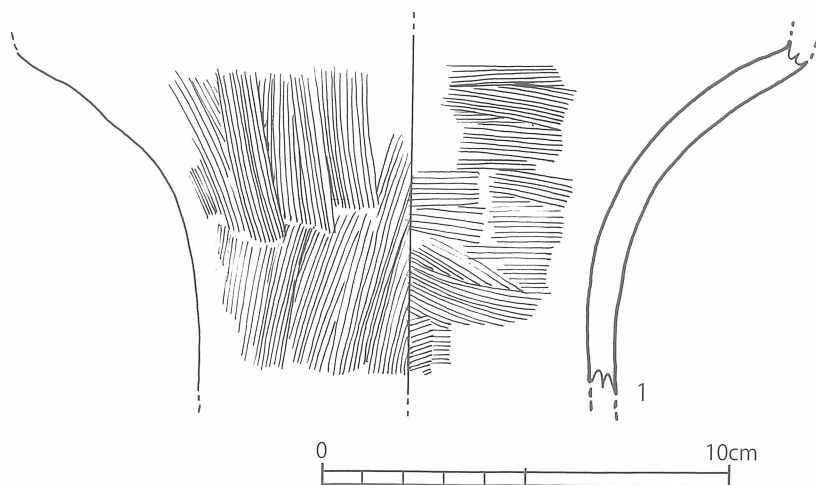
遺物は覆土中より土師器小片が出土しており、いずれも小片である。坏の底部は全て回転ヘラ切り調整である。(第 14 図 1～4)。



第 14 図 弥五郎遺跡 SK04 出土遺物
(S = 1 / 2)

③ その他 (第 15 図)

その他、表土層中より弥生時代後期の壺形土器の破片が出土している (第 16 図)。今回の発掘調査では弥生時代の遺構は発見されなかったが、周辺での既往の調査事例等も考慮すると今回の調査地にも弥生時代集落の一部がかかっていた可能性を想起させる遺物である。



第 15 図 弥五郎遺跡表土層出土遺物 (S = 1 / 2)

5 総 括

弥五郎遺跡は、八女市の西端部に所在する室岡遺跡群の西端部に位置する。室岡遺跡群は、弥生時代を中心とした旧八女市を代表する集落遺跡のひとつである。

弥五郎遺跡では、過去に土器出土が確認された事例や試掘・確認調査等により、集落遺跡の存在は確認されてきた。本調査は約 150 m²と小さな範囲ではあるが、本格的に発掘調査を実施したのは本調査が初の事例である。調査では、過去の出土品から予想された弥生時代後期～古墳時代初頭ではなく、古代の遺構・遺物が確認され、弥五郎遺跡の北半部には平安時代を中心とした集落跡が展開している状況が明らかとなった。

上層の包含層や当時の生活面は現代の削平により残存しておらず、遺構の残存状況は決して良好ではなかったが、遺構は、掘立柱建物跡 3 棟の可能性がある柱穴（ピット）と、廃棄土坑の可能性が高い土坑が確認された。出土遺物は、弥生時代後期土器が 1 点確認された他は、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器である。これらの遺物の時期はいずれも、9 世紀前後が想定される。

その中でも、SK03 から出土した緑釉陶器は、小片ではあるものの注目される遺物である。胎土の特徴から、防長系の緑釉陶器と推定される。近隣の久留米市域では、筑後国府跡のある久留米市合川町付近では愛知県猿投窯産の緑釉陶器も出土するが、防長系の緑釉陶器は国府跡のみならず約 500m 圏内でも出土するが、久留米市でも出土例は国府跡の所在する合川町および郡衙推定地である三潆町周辺のみでの初都度であるとのことである。八女市および西海道が通る西隣接の筑後市でも出土例は現段階ではほぼ知られておらず（筑後市教育委員会ご教示）、小片ではあるが貴重な発見となった。単なる集落遺跡ではなく、今後の周辺の調査では、公的な施設等の存在も考慮して臨む必要があると思われる。なお、西隣の筑後市域では、当該地の西側約 2 Km で西海道が南北に通っていることが既往の調査から判明しており、弥五郎遺跡から西海道は見通せる位置にあるものと推定される。ただし、弥五郎遺跡が所在する室岡遺跡群においても現段階では郡衙等の公的施設は推定されていない。今後の調査成果が期待される。

本調査地周辺は、国道 442 号線バイパスの開通以来開発が進み、近年住宅地として変貌を遂げているが、弥五郎遺跡周辺では上記の通り重要な遺構・遺物が埋蔵されている可能性が高いため、今後も細心の注意が必要である。

第1表 弥五郎遺跡出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器形	焼成	色調 (外面 / 内面)	胎土	成形・整形手法等	寸法		備考(種類・残存等)	実測図 番 号
							口径 (底径)	残存高		
第7図1	P-01	土師器 環	軟質	にぶい黄褐 / にぶい黄褐	砂礫 少	内外面共に回転ナデ整形の後底部ヘラ切り。	12.9 (7.4)	3.7	SB01・SB02	R1
第7図2	P-06	土師器 甕	軟質	褐 / 褐	a	内外面ともにナデ。	13.0	3.2	SB03	R3
第10図1	SK02	土師器 環	軟質	橙 / 橙	砂礫 少	回転ナデ成形後、底部回転ヘラ切り。	12.2 (5.9)	3.8		R10
第10図2	SK02	土師器 高台付環	軟質	にぶい黄 / 明赤褐	砂礫 少	回転ナデ成形後、底部回転ヘラ切り。	—	1.2	外面黒斑有。	R9
第10図3	SK02	土師器 環	軟質	明灰黄 / 明灰黄	砂礫 少	回転ナデ成形後、底部回転ヘラ切り。	(7.7)	1.2		R14
第11図1	SK02	須恵器 壺	硬質	灰 / 灰	砂礫 少	内外面ともにヨコナデ。	23.4	2.3	口縁部片。	R8
第11図2	SK02	須恵器 甕	硬質	にぶい黄褐 / にぶい赤褐	砂礫 少	外面格子目タタキ、内面青海波状文タタキ。	—	6.0	胴部片(頸部付近)。	R6
第11図3	SK02	須恵器 甕	硬質	にぶい赤褐 / にぶい赤褐	砂礫 少	外面格子目タタキ、内面タタキ。	—	11.1	胴部片。	R4
第11図4	SK02	須恵器 甕	硬質	にぶい赤褐 / にぶい赤褐	砂礫 少	外面格子目タタキ、内面タタキ。	—	8.7	胴部片。	R7
第12図1	SK02	須恵器 甕	硬質	明赤褐 / にぶい赤褐	砂礫 少	外面格子目タタキ、内面タタキ。	—	11.5	底部付近の破片。	R5
第13図1	SK03	緑釉陶器 皿	硬質	浅黄 / オリーブ黄	砂礫 少	内外面ともに丁寧なナデ。	11.0	2.2	防長系(胎土より)。	R11
第13図2	SK03	緑釉陶器 耳皿	硬質	オリーブ黄 / オリーブ黄	砂礫 少	内外面ともにナデ。耳部に指圧痕残る。	—	2.4	防長系(胎土より)。	R12
第13図3	SK03	土師器 壺	軟質	橙 / 橙	a	回転ナデ成形後、底部回転ヘラ切り。	20.8	5.3	外面黒斑有。	R13
第14図1	SK04	土師器 環	軟質	橙 / 橙	砂礫 少	回転ナデ成形。	13.8	2.5		R15
第14図2	SK04	土師器 環	軟質	にぶい黄橙 / にぶい黄橙	砂礫 少	回転ナデ成形後、底部回転ヘラ切り。	(7.2)	1.8		R16
第14図3	SK04	土師器 環	軟質	にぶい黄橙 / にぶい黄橙	砂礫 少	回転ナデ成形後、底部回転ヘラ切り。	(6.4)	1.0		R17
第14図4	SK04	土師器 環	軟質		砂礫 少	回転ナデ成形後、底部回転ヘラ切り。	(6.6)	0.8		R18
第15図1	表土	弥生土器 壺	軟質	にぶい褐 / にぶい褐	a	内外面ともにハケ後ナデ。	—	8.7	直口壺か。	R2

※ 胎土欄の記号は、含まれる砂礫の一部に着目したものであり、下記の通りである。

a: 片岩 + 石英(矢部川流域に特徴的な胎土)

版 圖



弥五郎遺跡調査前風景（南より）



表土除去作業（西より）



遺構検出作業（東より）



遺構掘削作業（調査区南東・南東より）



遺構掘削作業（調査区北側・西より）



遺構検出状況（南より）



遺構検出状況（南東より）



遺構完掘状況（南より）



遺構完掘状況（北半遺構集中部分・東より）



土器出土状況（P-01）



SK01（右端）・SK02（中央）



SK03（奥）・SK04（手前）



P-01 (SB01 · 02) 出土土器 (7 图 1)



P-06 (SB03) 出土土器 (7 图 2)



SK01 出土土器



SK02 出土土器 (第10图)



SK02 出土土器 (11 · 12图)



SK03 出土土器



SK03 出土土器



SK04 出土土器 (13图 3)



SK04出土緑釉陶器（第13図 1・2）

※上：外面、下：内面



SK04 出土土器



表土層出土土器（第15図）

報告書抄録

ふ り が な	やごろういせき								
書 名	弥五郎遺跡								
副 書 名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻 次									
シリーズ名	八女市文化財調査報告書								
シリーズ号	第 1 1 5 集								
編 著 者 名	檀 佳克（だん よしかつ）								
編 集 機 関	八女市教育委員会								
所 在 地	〒834-8585 福岡県八女市本町 6 4 7 TEL. 0943-23-1982 FAX. 0943-24-4331								
発 行 年 月 日	西暦 2016年12月28日								
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因	
		市町村	遺 跡 番 号	。 ' "	。 ' "				
やごろういせき 弥五郎遺跡	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 むろおかあざしけい 室岡 字 志計775-1	402109	408016	33° 12′ 54″	130° 31′ 15″	20151104 ～ 20151117	約150㎡	共同住宅 建 設	
所収遺跡名	種 別	主な時代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
弥五郎遺跡	集 落 跡	平安時代		掘立柱建物跡・土坑		土師器・須恵器・陶器			
要 約	共同住宅建設に伴い発掘調査を実施した弥五郎遺跡に関する報告である。 今回の発掘調査では、平安時代の集落跡の一部について、記録保存のための発掘調査を実施した。 調査では掘立柱建物跡と思われる柱穴および土坑が発見され、土師器・須恵器や緑釉陶器が出土した。緑釉陶器は防長系のものと思われ、弥五郎遺跡・室岡遺跡群では初の出土例であり、注目される。								

※座標は世界測地系による。国土地理院ホームページの地図検索システムより得たものであり、基準点測量によって得た値ではない。

弥五郎遺跡

八女市文化財調査報告書
第115集

平成28年12月28日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (株) 東兄弟
八女市祈祷院563